

イスラム教と仏教

寛容・慈悲・ヒューマニズム

サドルティン・アガ・カーン

「東洋学術研究」への今回の寄稿にあたり、「イスラム教と仏教からみた人間と人間の権利」というテーマで、私の一連の考えを述べてみたいと思います。といいますのは、特に両者の重要な伝統が、人間とは何かを理解せしめ、我々の生活や双方の文化に直接かかわっているからです。

イスラムと仏教は、その教義や哲学においては確かに異なった表現を用いていますが、この二つの宗教は、「人間とは、人間の権利とは何か」といった問題に対して共通の考え方をもっています。

人道博愛主義が目指すもの、それは個人が自身の幸福を向上させると同時に、同胞すなわち、自分をとりまく周囲の人々の人権をも尊重する方向へ、一人一人を導くことです。

ハッサン・ビン・タラルヨルダン皇太子と私が主宰している「Independent Commission on International Humanitarian Issues」(国際人道問題独立委員会)は、人道主義に携わる機関です。

当委員会の報告書にもありますように、人道博愛主義とは、人々の福祉と幸福を基本的指針としています。経済的繁栄、政治的権力、あるいは秩序の安定に、たとえどんなに役立っても、人間の幸福から外れるいかなるものも、人道博愛主義の立場からは、問題視されなければなりません。繁栄、安定、秩序といったものは、それ自体が目的ではなく、人間の真の幸福のための手段となつて、初めてその価値を持つのです。

人道博愛主義は、我々誰もが一人の人間にすぎず、それ以上の存在でも、それ以下の存在でもないという認識から出発しています。

この根本的課題は、イスラム教、仏教のそれぞれの信者のみならず、人類のすべてに関連する問いかけであるといえましょう。以下、イスラムにおける寛容と福祉の概念を、仏教の慈悲(利他の愛)と比較しつつ、論を進めていきたいと考えます。

それぞれの概念は、この二つの宗教が人道主義、博愛主義の普及に貢献する上で果たしてきた役割を考えれば、より良く認識されるであります。人道博愛主義とは、人間に内在する善を訴えることによって、世界平和への枠組みを築くことを目標とした普遍的思想です。

イスラム教とイスラム世界

一神教としては最も新しいイスラム教は、その起源を七世紀初頭のアラビアに求めることができます。預言者マホメット〔訳註〕を通して啓示されたイスラムの教義は、聖典「コーラン」の中に説かれています。「イスラム」なる語は、服従と平和といった二つの意味を含んでいます。その成立以来、イスラムは次の三つの基本理念に基づいた宗教でありました。

①「タウヒード」⁽²⁾——人間も自然界も唯一の神の創造物であること。②「ハリーフア」⁽³⁾——人間が代理人として果たす役割。人類の幸福、自然界の調和を維持する責任を神が人間に受託したこと。③「アフラフ」——人間は神の受託を責任もって遂行すべきであり、神の信頼を悪用すれば神が報いを課すこと。

イスラムは道德規範であり哲学〔註〕であり、また社会秩序を守る体系でもあります。イスラムは一連の規範を示しており、これによって一人一人が社会において秩序ある生活を営むよう努力できるのです。つまり、信仰者とは

いかにあるべきかという指針に基づいているのがイスラムの教えであります。

イスラムは、法のもとではすべての人が平等であることを根本としています。さらに人類の将来に対する責任は個人個人が担っており、他人に対する寛容な態度が大切であると教えています。そして、このような同胞愛から正義感が生まれるのです。これらの指針は、人種、民族、国籍を問わず、すべての人間に向けられたものと言えましょう。社会哲学・政治哲学ともいべきイスラムの理念は、人間一人一人に、善悪を分別するための自由意志を授けていますから、個人が自身の宿命を克服していくことが可能です。イスラムは生きた世界観であり、その理念と指針は、概念とか価値観とかいったものを実践的な形で示しています。^[5]

イスラム教における寛容

イスラムは、寛容の精神に基づいて秩序ある生活を営むための普遍的思想を包含しています。すなわち寛容こそが、全世界の調和を築く根本原理であるといえます。

この地方の共同体に既に存在していた法律がいくつかあったのですが、マホメットの憲法は、異なった部族の共同体において、相互寛容の精神を可能にした理にかなった最初の律法として、多くの研究者たちから広く認識されていきます。

こうしてイスラム教徒以外の人々には、各自が信仰する宗教の教義や実践に従う自由が与えられました。しかしながら、それらの人々もイスラム教徒同様、国家に対しては忠実でなければなりませんでしたし、現在でもそうあるべきなのです。マホメットの時代以来、イスラムのもとでの共同体機構は、いわば高度な複合国家的体制を形成していたといえましょう。^[6]

イスラム社会において共同体的調和と直接関連しているのは「福祉」の概念であり、それは道徳的、倫理的、物質的幸福の向上を目指した、個人的あるいは集団的なゆまざる努力を意味しています。この福祉と寛容の二つが結びつき、イスラムの普遍性が生まれるのです。寛容であることにより、一人一人が自身の幸福の向上を達成できるのであり、それがいずれは、その人を取り囲む

イスラムが説くのは、極端な主義主張を排し、人類が平和を実現、継続させるために、人間が本来持つて生まれた知性や判断力を磨くことであります。宗教の本質とは、片寄ることのない中庸の道を探求することでありましょう。

イスラムはその成立以来、人間がエゴからおこす戦争をなくし、社会的不公平を是正する方法として、普遍的寛容の精神を重要視してきました。預言者マホメットがサウジアラビアのメディナに向けて出発した当時、このメディナの町は、強力なメッカの軍隊の侵略に対し恐れをなしていました。マホメットは町の防衛軍を組織しましたが、この町のすべての人民がイスラム教徒であったわけではありません。

マホメットは当初メディナの異なった部族の長と行動を共にし、各部族が彼らの軍事力を統一しよう提案しました。その結果、メディナはメッカの軍勢に対抗できたのです。さらに預言者マホメットは、メディナで成文化した憲法をつくり、その下で異なった部族が平和共存できるようにしました。ハムラビ法典のように、当時

共同社会の福祉へとつながっていくのです。共同体の調和は最初のステップであります。イスラム共同体の安穩が全世界の安穩へと広がっていった時、宗教として、あるいは哲学として、さらには共同体組織としてのイスラムは、最終的にその目標を達成したことになるわけですから。

しかしながら、地上においてイスラム社会が存在しなかった地域や、イスラムが現存の秩序を脅かすものでありと考えられている所では、イスラムの理念がしばしば誤解されることもあります。今日においてこのような観念が支配的であるのは、とりわけ、中東やアジアの地域で、政治的勢力としてイスラムが復活したことにも、ある程度原因があります。

一連の反発分子によって起こされたサダト・エジプト大統領の暗殺^[8]、さらに、イスラム世界、特にイランにおけるイスラム原理主義運動の高揚^[9]、長期間にわたったイラン・イラク戦争等、これらはそのような誤解を生むいくつかの例でありましょう。こうした現実の情勢では、多くの人々が、イスラムを暴力的、非寛容的なものと考

えるのは無理ありません。

果たしてこれらの現状は、イスラムの倫理的価値と相反するものなのでしょうか。これらの現象は一つには、イスラム世界における分裂がもたらした反動が要因であり¹⁰、他方、近代化や浪費文化にうつつを抜かず西欧思想や精神的価値の欠乏が、イスラム国家の基盤を弱体化させているのではないか、という懸念から生じたものでありましょう。これらの問題に対処すべく、イスラム原理主義者たちはイスラムがその原点に帰ることを要求して、本来の理念をまっとうするのを妨げている勢力に対抗すべく、過激な行動に訴えているのです。

伝統的なものの考え方と近代的なそれとが衝突することから生ずるジレンマは、もちろん、イスラム社会にのみ存在する現象ではありませんが、イスラムはしばしば最も非妥協的な哲学の一つと考えられてきました。しかしながら実際には、イスラムは預言者マホメットの時代から知識や新しいものの探究に身を注ぎ、近代化に順応することを試みてきました。実社会に役立つ知識を限りなく探求していくことこそ、イスラムの根本的信念で

す。

歴史、地理、科学、とりわけ数学の分野での進歩に対し、イスラム社会は独創的な貢献をなしました¹¹。しかしながら、知識の発達（例えば、いかに効率よく国家管理を行うか等）は、もともと社会のために役立ってこそ、その価値があるもので、知識のための知識となり、社会そのものから遊離してしまえば、たとえイスラムがどんなに前向きな努力を示しても、社会的調和を図る力にはなりません。イスラムの信仰者たちは、道徳的価値観が近代化の歩みについていけなくなってしまうところに、今日の不幸の原因を見い出していると言っても過言ではありません。果たして「近代化」が意味するのは「西欧化」のことなのでしょうか。¹²

日本における仏教

日本文化は明らかにイスラム文化とは異なりますが、日本もまた、めまぐるしい変化に対応し、外来の概念を自国の伝統に取り入れなければなりませんでした。しかしながら、多くの文化とは異なり、日本は近代化に挑戦

し、見事これをなしとげました。けれどもその経済成長は多くの犠牲のもとに達成されました。国民の勤勉性と誠実さにもかかわらず、日本はその伝統的価値の喪失という形で大きな代償を支払ったのです。一連の日本人思想家によれば、急激な近代化が数々の問題を引き起こしたということです。

家庭秩序の崩壊、道徳観の欠如と心の空洞、ストレスによる精神病の増加、不自然な生活形態、途方もない浪費、そして環境の微妙なバランスを保持することへの尊厳なき態度等、取り上げられるべき問題は様々です。日本の今日の人口問題、地理的実情を考へるならば、日本的伝統の上でも重要な意味をもつ社会共同体の調和を目指す努力が不可欠であります。果たしてこの目標は達成されるのでしょうか。

日本においても、またイスラム世界においても、近代化がもたらした致命的衝撃を柔らげる手段として、道徳観を重んずる精神主義の復活が唱えられています。確かに技術の進歩は、物質面での豊かさの向上へとつながりましたが、人々から欲望を取り除いたり、戦争や不正へ

と走らせたりすることは阻止できませんでした。すなわち進歩によっても、人間がもともと持っている欲望とか、自分たちの仲間や周囲の環境をなおざりにする潜在的残忍性等は、決して変革されませんでした。宗教を、近代社会における時代遅れの指針として、片隅に追いやるべきではありません。仏教もイスラム教同様、人間がもつとよく自分自身を知り、その周囲の環境に対し深い理解を示すよう、人々に働きかけることが可能なのです。

仏教は慈悲の宗教

仏教は知恵を開眼し、非暴力を理想に掲げる慈悲の教えです。慈悲の実践、もつと的確な日本語にすれば「利他的愛」によって、人類の悪の根源である欲望の克服に努めるのです。日本の仏教用語によれば、「慈悲」とは個人が他の人々と喜びや悲しみを分かち合うことのできる個々に備わった能力です。つまり一人一人が宇宙の完全な構成体であることを自覚し、やがて人類全体がエゴを放棄するような状況に至ることが、「慈悲」の意味

するところでありましょう。一人一人が慈悲をもち、そのエネルギーを平和活動に向けることで、社会全体の調和が達成されるのです。

仏教の教えは、自然界における相互依存の関係を説きつつ、すべての存在に対する健全で前向きな姿勢を重要視しています。

「利他の愛」を実践することによって、人類は倫理的、精神的価値を損なうことなく、科学の分野で新生面を開くことができるのです。

非暴力を根本原則とするならば、人々は暴力に向かう欲望を創造的エネルギーへと変換する道を切り開くことができるでしょう。「慈悲」はさらに、人類が自然界の他の存在や生物と相互活動を営む上での、人間の公正な振る舞いも指し示しています。仏教の教えるところは、つまり、心の平穩をいかに確立し、社会共同体の調和をどのように築くかということにあります。これが意味するのは中道、すなわち慈悲は中庸を説いているということになります。

寛容・慈悲・ヒューマニズム

寛容と中庸がそれぞれイスラムと仏教の中心をなすものですが、これはあらゆる人々にあてはまる概念です。なぜならば、どのようにして、一人一人が人間性を確立できるかを説いているからです。イスラムの伝統と仏教の伝統についてはまず、その相違を認めることから出発すべきでしょう。むしろその多様性が、より豊かな理解につながるのではないのでしょうか。これらの宗教的伝統こそが、個人的あるいは人類に共通した人間の幸福を、確実にもたらすものなのです。

人道博愛主義の展望に立てば、人は矛盾をはらんだ厄介で困難な現実に対処できます。それは同時に、宗教によって説かれた理想を在家の立場で具現することであり、一人一人がとるべき姿勢です。人道博愛主義は、在家の指導者が一同にして、共通の課題に取り組む一つの理論体系です。人道博愛主義の基本理念は次のように挙げられます。

○あらゆる生活様式の尊重。

○未来を担う世代に対する責任感。

○自然界の生物の保護。

○相互利益の観念によって培われる利他主義。

人間に本来備わっている長所を伸ばすことを目標とした仏教、イスラム教、あるいはその他の宗教の伝統や哲学などと力を合わせることにより、人道博愛主義は普遍的世論に基づいた倫理規範となるべきでありましょう。我々が自覚して行動を起こさなにかぎり、過密な人口や貧困、飢えと文盲、そして差別や圧迫等は絶えざる社会悪として存在し続けるでしょう。

環境問題もまた、なおざりにすべきではない関心事です。我々人類は自然の均衡の微妙なバランスを左右する力をもっているからであり、この均衡が崩れれば多くの有機物や無機物の生活形態が存在不可能となります。汚染、自然資源の枯渇、日々絶えない森林、土地の破壊や植物、動物の絶滅等、我々自身がもたらした数々の問題を解決するのは我々自身です。つまり、人類共通の基礎

的資源が何故低下してしまったのか、我々のみが説明できるのです。

人道博愛主義は数々の普遍的問題に立ち向かっていく試みであり、倫理と人権の一つの橋渡しとなるものです。この倫理と人権は、社会全体を健全に保ち、さらに現在及び未来の世代の安全を、約束するものでなければなりません。人道博愛主義は、人間相互間の不信感、周囲に対する思いやりのなさ等を、各人が問題意識として持つよう、あらゆる人々に呼びかけています。

欲望の追求、権力志向、そして人種的偏見などが限りなく増長されていることは、果たして許されるべき現実でしょうか。我々一人一人は具体的な行動を起こすことができるのです。仏教もイスラムも平和を説いています。いまこそ平和行動を実践する時です。宗教的教えと一体となつて進む世俗の立場での運動として、人道博愛主義は全人類の平和共存がいかに大切であるかをここに提唱するものです。

[1]

コーランで彼は「神の使徒」「預言者」「警告者」などの語で呼ばれ、アブラハム、モーセ、イエスなどの一連の預言者の系列において「最後の預言者」と位置づけられている。イスラム教徒とその社会にとつて、日常生活から国家の政治に至るまで、神の意志が絶対のものとなる。その意志は、預言者に下された啓示に示される。預言者以外の人間には、神の意志は直接には伝わらず、また最後の預言者がマホメットであるから、マホメット（五七〇―六三二）以後の人間はマホメットの下された啓示を集成したコーランによって、最も正しく神の意志を知ることになる。

マホメットは二十五歳のころ結婚し、以後平穏で安定した生活を送った。ある時期から、彼は郊外の山の洞窟で、しばしば瞑想にふけるようになる。そのような瞑想中、突然彼は異常な経験をする。全身が押しつぶされるような感覚があり、大天使ガブリエルが啓示を「誦め」と命じたと伝えられる。最初の啓示は彼が四十歳（六一〇年）のころにあった。以後啓示は、彼が死を迎えるまでの二十数年間にわたって断続的であった。預言者と自覚したマホメットは、人々に警告し始めた。主として若者からなる信徒集団が形成されたが、彼はあくまで「預言者」「警告者」であり、決して神性を有するとも、信仰崇拜の対象であるともされてはいない。

[2]

一口に「タウヒード」といっても、人により、また学派や宗派によってその具体的内容は異なる。たとえば一

般のイスラム教徒にとつては、それは「アッラーのほかに神なし」ということを告白し、他の神を現実には崇拝しないことである。神学者にとつては、神が一つということとは、神の独一性、神と被造物の隔絶性、具体的にはコーラン等にあらわれる「擬人的」表現の解釈をめぐる議論である。

[3]

元来は「継承者」「代理者」を意味し、歴史上は「カリフ」の呼称で知られている。通常は初期イスラム国家の最高権威者を指す。マホメットは後継者を指名せずに死んだので、イスラム教団は一時分裂の危機に瀕したが、結局アブー・バクル（マホメットの古くからの友人で彼のよき補佐役であった）に忠誠の誓いを立て、彼が指導者となった。その時「神の使徒」すなわちマホメットの代理という意味で「ハリーフ」と称したのがカリフの呼称の最初である。

カリフ位の本質は宗教の保全と現世の政治についてマホメットの代理をなすことにあり、具体的には礼拝、裁判、聖戦、生活倫理といった諸規定、さらに行政、財務に関する諸規定の執行責任があるとされた。カリフの選出は原則的には資格をもった選挙人によるが、カリフが次代の者をあらかじめ指名してもよいとされ、父子相続も事実上承認されている。またカリフに異端信仰もしくは乱行、精神的、肉体的欠陥の発生、自由行動権の喪失の諸事態が発生した時は、廢位されてもやむを得ないとされた。

[4]

イスラム哲学の伝統は、七世紀にイスラム教徒により征服された中東諸国に存在していたヘレニズム哲学の遺産をイスラム文化が継承し、新興イスラム帝国治下での研究が大いに奨励されたことに由来する。イスラム教徒による哲学研究の開始当初は、とくにギリシャの思想家の著書のアラビア語への翻訳に重点が置かれた。これらの翻訳活動のうちでとくにアリストテレスに関しては、その著作の大部分がアラビア語に訳されて研究されるようになった。しかしこうしてアラビア語訳されたアリストテレスの作品は、新プラトン主義者の解釈を根拠に紹介されたので、イスラム世界におけるアリストテレスの哲学は、新プラトン哲学の色彩を濃く漂わせるものになった。このようなかたちでアラビア語に紹介されたアリストテレスの研究が、イスラム世界での哲学研究の主流となった。

[5]

コーランでは、人間には従うべき「道」があり、それは人間の思惑や思いつきではなく神が啓示し定めた真理として用いられている。イスラムの法はすなわち、人間の正しい生き方の具体的表現にほかならない。イスラムにおいて正しく生きるとは、神の啓示に従順であることの意味する。

人間はいかなる時、いかなる場合でも啓示に基づいて正しく考え、正しく行動しなければならないとすれば、神の正義は少なくとも理念的には人間生活の全分野に妥協するものでなければならぬということになる。事実

[6]

イスラムの法は、個々のイスラム教徒の宗教的生活のみならず、現世的、世俗的生活をも具体的に規制するものである。その内容は浄め、懺悔、礼拝、喜捨、断食、巡礼、葬制などにかかわる儀式的規範から、婚姻、離婚、親子関係、相続、奴隸と自由人、契約、売買、訴訟、裁判、イスラム教徒以外の入々の権利と義務、犯罪と刑罰、戦争などの公私両法にわたる法的規範をも含んでいる。神の啓示した啓典（モーセの五書、キリスト教徒の福音書）に基づく信仰をもつ民を、イスラムでは啓典の民とよび、コーランにおいて啓典の民として扱われているのはユダヤ教徒、キリスト教徒である。コーランは本質的にはこのような啓典と同じ性格のものであり、啓典の民は元来はイスラム教徒と同じ信仰の持主であるとされる。彼らが神と最後の審判の日を信じ善行を重ねれば天国が約束されている。しかし、多くの啓典の民は啓典を誤って理解し、正しい信仰の道を歩んでいない、と預言者マホメットはみなし、イスラムの法もそうみなしている。

コーランは彼らの誤解を正すために啓示されたものとされ、したがって、イスラム教徒が啓典の民より、より正しい道にあるとされる。それ故、啓典の民はその信仰の放棄は強制されないが、「ジンミー」の地位にとどまるべきもの、とするのがイスラム法の基本である。「ジンミー」とは生命、財産の安全保障を与えられた非イスラム教徒に対する呼称である。理念的な法理論では、ジ

ンミーは神の啓示を信じ、聖書をもつ啓典の民、すなわちユダヤ教徒とキリスト教徒に限られ、仏教徒のような偶像崇拜者や多神教徒は本来は含まれていなかった。しかし実際のアラブの征服過程では、服従した民はすべて「ジンミー」とされた。

[7] イスラム共同体はアラビア語で「ウンマ」と呼ばれ、これがコーランにおいて意味をもつのは、民族、部族そのものとしてではなく、神が人類救済の歴史の中で使徒を遣わし、人間に呼びかけるその単位集団としてである。大部分のウンマはこの呼びかけを拒み、神の命令にそむいて神罰を受け、滅びたとされている。しかし、あるウンマは使徒を受け入れた。モーセのウンマ、イエスのウンマがそれぞれ「律法の書（モーセの五書）」「福音書」を神から与えられた、とイスラムではみなしている。しかし、彼らも互いに対立し、啓典を改ざんし、あるいは使徒を神格化して道を踏み誤ったといわれるといわれる。そこで最後の使徒として遣わされたのがマホメットであるとされる。そしてマホメットのウンマは神の啓典コーランを正しく保持し、これを正しく実践するものとして出発した。このマホメットのウンマであるイスラム共同体こそ神の下した真理を正しく地上に具現するものであり、正義の行われる理想社会の実現を目指し、神のよしとする祝福された聖なる共同体であるとし、イスラム教徒はその全人類の使命を強調している。

[8] サダト大統領が米国への依存傾向を強める中で一九七

七年十一月イスラエルを訪問、続いて翌年九月イスラエル、米国とともにキャンプデービッド合意に調印し、さらに一九七九年三月イスラエルとの平和条約に調印したことは、イスラム原理主義グループの反サダト的動きを一挙に強めさせた。

イスラム原理主義とは後世の逸脱、歪曲を排して初期のイスラムの原則や精神の回復を目指す立場をいう。それが単なる復古主義でないのは、純化されるべき伝統がそもそも何であるかを問うものだからである。イスラムの現状を衰退、墮落として批判し、状況を打開、是正することを課題として自覚し、原理主義者は様々な運動を展開している。

[9] イスラム原理主義者を奉ずる人々は社会悪や不正を正すため、しばしば行動様式として急進的であるので、そ

の意味では「イスラム急進派」と呼ぶことができる。日本の新聞などでは「イスラム過激派」という言葉が使われることが多い。

イスラム原理主義者は彼らの目指す社会正義のため、時には超大国そのものに挑戦し、また時には超大国を手玉にとる。イランのホメイニ師はアメリカを「大サタン」、ソ連を「小サタン」またアメリカに同調するサウジアラビア等のペルシャ湾岸のアラブ諸国を「ミニサタン」と称して非難している。イスラム原理主義者は中東世界ばかりでなく全世界的規模で、西側陣営にも東側陣営にも属すことのない「イスラム世界秩序」の樹立を呼びかけてやまない。他方、イスラム原理主義者でないイスラム教徒は、戦闘的時には暴力に走る原理主義者を「熱狂者」あるいは「狂信者」の名で呼んでいる。

[10] 中東ではイスラムが政治的にも宗教的にも支配的であるが、しかしイスラム地域においても非イスラム地域同様、分裂がある。中東のイスラム地域の分裂は、近年宗派間の対立に顕著にあらわれている。イスラムでは、多数派のスニー派と少数派のシーア派が二大宗派だが、一九七九年イランにホメイニを師と仰ぐシーア派主導の政権が誕生した。レバノンでもシーア派の力が急伸している。このためスニー派の側がシーア派に対して警戒心と対抗心を強めてきている。さらにイスラム世界の分裂は、宗教的要因のほかには様々な局面での対立があるといえる。

① 世俗国家に変えようとした人々と、政教一致のイスラム共同体を樹立しようとした人々の対立

② イスラム近代主義者はイスラムを改革し、イスラムを現代的な生活に適應させようとする。これに対し伝統主義者は伝統的イスラムの戒律に固執し、西欧その他の影響力を一切拒絶する。

③ 既存イスラムとしての支配エリートと、現状変革を求める反支配者グループとの基本的対立。

④ 経済エリートとイスラム社会主義の対立。すなわち社会が富める者と貧しい者との両極化した結果、イスラム原理主義者およびその他の反体制グループは、道徳的正統性の欠如した既存経済秩序と対立し、富の公正な配分を通じての社会主義を唱える。

⑤ 黙想と神秘的教えを通じて精神的な救いを強調するイスラム神秘主義思想（スーフィー）は、普通イスラムの戒律を文字通り解釈する中で神と個人との統一を強調する。これに対し原理主義者は社会を再編成し、救いを得るための手段として政治的な行動主義と結びついた厳格なイスラムの遵守を主張する。

[11] いわゆる「アラビア科学」と呼ばれるものは、七五〇年に始まるアッバース朝下において、ギリシャ科学の精華をほとんどすべて消化吸収することにより始められた。この「アラビア・ルネッサンス」のもとに、八世紀から九世紀にかけて医学、薬学、数学、天文学、化学（錬金術）などを中心とするアラビア科学の基礎が定められ

た。さらに十世紀から十一世紀にかけては、東のアップパー朝のバクダード、西の後ウマイヤ朝のコルドバ、南のファーティマ朝のカイロなどを中心としてアラビア科学の黄金時代が到来した。十二世紀以降は西欧世界がこのアラビア科学を移入消化し、しだいにこれに取って代わる時代であるが、十五世紀にいたるまでイスラム世界も、南スペイン、北アフリカ、中央アジアなどで発展を続けた。これらのアラビア科学に通ずる特徴として、特にシニア派的な科学の伝統においては、自然を知ることが神を知ることであるというグノーシス思想との結びつきが強く、これが錬金術や占星術のような秘教科学を發展させた。

[12] 中東世界の支配者による軍事的・経済的近代化路線の追求は、そもそも近代化イコール西欧化であったため、大多数の民衆にはなじまない行動様式や価値を持ち込むことになった。この結果、近代化路線を推進する支配者と伝統的価値をより重視する民衆との間に鋭い裂け目が生じた。近代化路線を推進する側は西欧の理論と実践を全面的にまねる方に傾き、一方、伝統を重視する側は近代化を一部認めるにしても、西欧の経験を選別的に借りることを主張した。

このように近代化路線派は少数の支配エリート・グループから成り、イスラムの伝統的価値や行動に反すると考えられる西欧の社会行動様式を盲目的に取り入れようとすると。民衆になじまない行動、極端な消費を特徴と

する政治・経済エリートの進める表面的な西欧化は、彼らを、伝統を重視しなければならないと考える貧しい民衆から隔離させる。この結果、支配者と被支配者との間に、政治的に危険なカルチャー・ギャップが生じ、さらにこのギャップは、イデオロギー的空白へとつながっていく。

(国際人道問題独立委員会議長)

訳・石原忠佳(いしはらただよし・創価大学講師)